

覆面の舞踏者

江戸川乱歩

青空文庫

一

私がその不思議なクラブの存在を知ったのは、私の友人の井^{いのう}上次郎^{えじろう}によつてでありました。井上次郎という男は、世間にはそうした男が間々^{まま}あるものですが、妙に、いろいろな暗黒面に通じていて、例えば、どこそこの女優なら、どこそこの家^{うち}へ行けば話がつくとか、オブシーン・ピクチュアを見せる遊^{ゆう}廓^{かく}はどこそこにあるとか、東京に於^おける第一流の賭場^{とば}は、どこそこの外人街^{まち}にあるとか、その外^{ほか}、私達の好奇心を満足させるような、種々様々の知識を極めて豊富に持合せているのでした。その井上次郎が、

ある日のこと、私の家へやって来て、さて改まって云うことには、
「無論君なぞは知るまいが、僕達の仲間に二十日会という一種の
クラブがあるのだ。実に変ったクラブなんだ。謂わば秘密結社な
んだが、会員は皆、この世のあらゆる遊戯や道楽に飽き果てた、
まあ上流階級だろうな、金には不自由のない連中なんだ。それが、
何かこう世の常と異った、変てこな、刺戟しげきを求めようという会な
んだ。非常に秘密にしている、滅多めったに新しい会員を拵こしらえないのだ
が、今度一人欠員ができたので——その会には定員がある訳だ——
——一人だけ入会することが出来る。そこで、友達が甲斐いに、君の所
へ話しに来たんだが、どうだい入っちゃ」

例によって、井上次郎の話は、甚だはなは好奇的なのです。云うまで

もなく、私は早速さつそく挑発されたものであります。

「そうして、そのクラブでは、一体全体、どういふことをやるのだい」

私が尋ねますと、彼は待つてましたとばかり、その説明を始めるのでした。

「君は小説を読むかい。外国の小説によくある、風変りなクラブ、例えば自殺クラブだ。あれなんか少し風変り過ぎるけれど、まあ、ああ云った強烈な刺戟を求める一種の結社だね。そこではいろいろなもよお催しをやる。毎月まいげつ二十日に集るんだが、一度毎ひとたびごとにアツと云わせるようなことをやる。今時この日本で、決闘が行われると云ったら、君なんか本当にしないだろうが、二十日会では、こつ

そりと決闘の真似事まねごとさえやる。尤も命がけの決闘ではないけれど、
或時あるときは、当番に当たった会員が、犯罪めいたことをやって、例えば人を殺したなんて、まことしやかにおどかすことなんかやる。
それが真しんに迫っているんだから、誰しも胆きもを冷すよ。また或時は、非常にエロチックな遊戯をやることもある。兎も角とかく、そうした様々な珍しい催しをやって、普通の道楽なんかでは得られない、強烈な刺戟あじわを味うのだ、そして喜んでいるのだ。どうだい面白いだろう

といった調子なのです。

「だが、そんな小説めいたクラブなんか、今時実際に在あるのかい」
私が半信半疑で聞き返しますと、

「だから君は駄目^{だめ}だよ。世の中の隅々^{すみずみ}を知らないのだよ。そんなクラブなんかお茶^{ちや}の子^こさ。この東京には、まだまだもつとひどいものだってあるよ。世の中というものは、君達^{くんし}君子が考えている程単純ではないのさ。早い話が、ある貴族的な集会所でオブリーン・ピクチュアの活動写真をやったなんてことは、世間周知^{しゅうち}の事実だが、あれを考えて見給え^{みたま}。あれなんか、都会の暗黒面の一片^{へんりん}鱗^{りん}に過ぎないのだよ。もつともつとドエライものが、その辺の隅々に、ゴロゴロしているのだよ」

で、結局、私は井上次郎に説伏^{せつぷく}されて、その秘密結社へ入ってしまったのです。さて入って見ますと、彼の言葉に嘘^{うそ}はなく、いやそれどころか、多分こうしたものだろうと想像していたより

も、ずっとずっと面白い。面白いというだけでは当りません、蠱こわくてき
惑的という言葉があります、まああの感じですよ。一度その
会に入ったら、それが病やみつきです。どうしたって、会員を止よそ
うなんて気にはなれないのです。会員の数は十七人でしたが、そ
の中でまあ会長といった位置にいるのは、日本橋にほんばしのある大きな
呉服屋の主人公で、これがおとなしい商売柄に似合わず、非常に
アブノルマルな男で、いろいろな催しも、主としてこの呉服屋さ
んの頭からしぼり出されるといふ訳でした。恐らく、あの男は、
そうした事柄ことがらにかけては天才だったのでありましょう。その発
案が一つ一つ、奇想天外で、奇絶怪絶で、もう間違はなく会員達
を喜ばせるのでした。

この会長格の呉服屋さんの外の十六人の会員も、夫々一風変わった人々でした。職業分けにして見ますと、商人が一番多く、新聞記者、小説家——それは皆相当名のある人達でした——そして、貴族の若様も一人加わっているのです。かく云う私と井上次郎とは、同じ商事会社の社員に過ぎないのですが、二人共金持の親爺おやじを持つていたので、そうした贅ぜいたく沢な会に入つても、別段苦痛を感じないのでした。申し忘れましたが、二十日会の会費というのが少々高く、たった一晩の会合のために、月々五十円ずつ徴ちようし収ゆうせられる外に、催しによつてはその倍も三倍もの臨時費が要るのでした。これはただの腰弁こしべんにはちよつと手痛い金額です。

私は五ヶ月の間二十日会の会員でありました。つまり五度たびだけ

会合に出た訳です。先にも云う通り、一度入ったら一生止められない程の面白い会を、たった五ヶ月で止してしまったというのは、如何にも変です。が、それには訳があるのです。そして、その、私が二十日会を脱退するに至ったいきさつをお話するのが、実はこの物語の目的なのであります。

で、お話は、私が入会以来第五回目の集りのことから始まるのです。それまでの四回の集りにしても、若し暇があればお話しなく思うのですが、そして、お話すればきつと読者の好奇心を満足させることができると信ずるのですが、残念ながら、紙数に制限もあることですから、ここには省くことに致します。

ある日のこと、会長格の呉服屋さんが——井関さんといいまし

た——私の家を訪ねて来ました。そうして会員達の家を訪問して、個人個人の会員と親しみ、その性質を会得して、種々の催しを計画するのが、井関さんのやり口でした。それでこそ初めて会員達の満足するような催しができるというものです。井関さんは、そんな普通でない嗜好しこうを持っていたにも拘らずかかわ、なかなか快活な人物で、私の家内なども、かなり好意を持って、井関さんの噂うわさをする程になっていました。それに、井関さんの細君さいくんというのが又、非常な交際家で、私の家内のみならず、会員達の細君連れんと大変親しくしていました、お互に訪問をし合うような間柄あいだがらになっていたので。秘密結社とはいいい条じょう、別段悪事を企たくらむ訳ではありませんから、会のことは、会員の細君達にも、云わず語らずの間

に知れ渡っている訳です。それがどういう種類の会であるかは分
らなくとも、兎も角、井関さんを中心にして月に一度ずつ集会を
催すということだけは、細君達も知っていたのです。

いつものことで、井関さんは、薄くなった頭を掻きながら、恵
比須様のようにニコニコして、客間へ入って来ました。彼はデッ
プリ太った五十男で、そんな子供らしい会などにはまるで縁のな
さそうな様子をしているのです。それが、如何にも行儀よく、
キッチンと座蒲団の上へ坐って、さて、あたりをキョロキョロ見廻
しながら、声を低めて、会の用談にとりかかるのでした。

「年度の二十日の打合せですがね。一つ、今までとは、がらりと
風の変ったことをやろうと思うのですよ。というのは、仮面舞踏
ふう

会なのです。十七人の会員に対して、同じ人数の婦人を招きまして、お互に相手の顔を知らずに、男女が組んで踊ろうというのです。へへへへ、どうです。一寸ちよつと面白うがしよう。で、男も女も、精々仮装をこらして頂いて、できるだけ、あれがあの人だと分らないようにするのはです。そして、分らないなりに、私の方でお渡ししたくじによって踊りの組を作る、つまり、この相手が何者だか分からないという所が、味噌なんです。仮面は前もつ以てお渡し致しますけれど、変装の方も、できるだけうまくやって頂きたい。一つはまあ、変装の競技会といった形なのですから」

一応面白そうな計画ですから、私は無論賛意を表しました。が、ただ心配なのは相手の婦人がどういう種類のものであるかという

点です。

「その相手の女というのは、どこから招かれる訳ですか」

「へへへへへ」すると、井関さんは、癖くせの、気味悪い笑い方を
して「それはまあ、私に任せておいて下さいまか。決してつまらない
者は呼びません。商売人だとか、それに類似の者でないことだけ
は、ここで断言して置きます。兎も角、皆さんをアツと云わせる
趣向ですから、そいつを明かしてしまつては興きようがない。まあまあ、
女の方は私に任せておいて下さい」

そんな問答を繰返くりかえしている所へ、折悪おりあしく私の家内が、お茶
を運んで来ました。井関さんは、ハツとしたように、居ゐずまいを
正して、例の無気味な笑い方で、矢庭やにわにヘラヘラと笑いだすので

した。

「大変お話がはずんでおりますこと」

家内は意味あり気に、そんなことを云いながらお茶を入れ始めました。

「へへへへへへ、少しばかり商売上のお話がありましたね」

井関さんは、取ってつけたように、弁解めいたことを云いました。いつも、そんな風な調子なのです。そして、兎も角、一通り打合せを済ませた上、井関さんは帰りました。無論、場所や、時間などもすっかり極^{きま}っていたのでした。

さて、当日になりますと、生れて初めての経験です。私は命ぜられた通り、精々念入りに変装して、あらかじめ予め渡されたマスクを用意して、指定の場所へ出掛けました。

変装ということが、どんなに面白い遊戯であるかを、私はその時初めて知ることができました。そのために態わざわざ々、知合いの美術家の所へ行つて、美術家特有の変てこな洋服を借り出したり、長髪のかつらを買求めたり、それ程にする必要もなかったのです。ようが、家内の白粉おしろいなどを盗みだして、化粧をしたり、そして、それらの変装を、家の者達うちに少しも悟られないよう、こつそりとやっている気持が、又堪たまらなく愉快なのです。鏡の前で、まるで

サーカスの道化役者^{どうけ}でもあるように、顔にベタベタ白粉を塗りつける心持、あれは実際、一種異様の不思議な魅力を持つているものです。私は初めて、女が鏡台の前で長い時間を浪費する気持が、分ったように思いました。

兎も角も変装を済ませた私は、異形^{いぎよう}の風体^{ふうてい}を人力車の幌^{ほろ}に隠して、午後八時という指定に間に合うように、秘密の集会場へと出かけました。

集会場は山の手のある富豪の邸宅^{てい}に設け^{もう}られてありました。傳^{くるま}がその邸宅の門に着くと、私は予^{かね}て教えられていた通り、門番小屋に見張り番を勤めている男に、一種の合図をして、長い敷石道を玄関へとさしかかりました。アーク燈の光が、私の不思議な恰^か

つこう
好を長々と、白い小石道に映し出していました。

玄関には一人のボーイてい体の男が立っていて、これは無論会が備やとつたものなのでしょう、私の風体を怪しむ様子もなく、無言で内部へ案内してくれました。長い廊下を過ぎて、洋風の大広間に入ると、そこにはもう、三々五々、会員らしい人々や、その相手を勤める婦人達が、立っていたり、歩いていた、長椅子に沈んでいたりました。おぼろ臙にぼかした燈光が、広く立派な部屋を、夢のように照し出していました。

私は、入口に近い長椅子ながいすに腰を下して、知人を探し出すべく、部屋の中を見渡しました。併しかし、彼等はまあ、何という巧みな変装者達なのでしょう。確かに会員に相違ない十人近くの男達は、ま

るで初めて逢った人のように、脊^せ恰好から、歩き振りから、少しも見覚えがないのです。云うまでもなく顔面は、一様の黒いマスクに隠されて、見分けるべくありません。

^{ほか}外の人は兎も角、古くからの友達の井上次郎だけは、いかにうまく変装したからといって、見分けられぬ筈^{はず}はあるまいと、瞳をこらして物色するのですが、私のあとから次々に部屋へ入って来た人達の内にも、それらしいのは見当りません。それはまあ、何という不思議な晩であつたことでしよう。いぶし銀のようにくすんだ色の広間の中に、鈍く光った寄木細工の床の上に、種々様々の変装をこらし、お揃いのマスクをはめた十七人の男と、十七人の女が、ムツツリと黙り込んだまま、今にも何事か奇怪な出来事

の起るのを待まち設けでもするように、ある者は静止し、ある者は蠢うごめいているのです。

こんな風に申しますと、読者諸君は、西洋の仮装舞踏会を聯れんそ想うされるかも知れませんが、決してそうではないのです。部屋は洋室であり、人々は大体洋装をしてはいましたけれど、その部屋が日本人の邸宅の洋室であり、その人々が洋装をした日本人であるように、全体の調子が、非常に日本的で、西洋の仮装舞踏会などとはまるで違った感じのものでありました。

彼等の変装は、正体をくらます点に於おいて極めて巧みではありましたが、皆、余りに地味な、或あるいは余りに粗暴な、仮装舞踏会という名称にはふさわしからぬものばかりでした。それに、婦人

達の妙に物おじをした様子で、なよなよと歩く風情は、あの活かつぱ澆しょうな西洋女の様子とは、似ても似つかぬものでありました。

正面の大時計を見ますと、もはや指定の時間も過ぎ、会員だけの人数も揃いました。この中に井上次郎のいない筈はないのだがと、私はもう一度目を見はつて、一人一人の異様な姿を調べてゆきました。ところが、やつぱり、疑わしいのは二三見当りましたけれど、これが井上だと云い切ることできる姿はないのです。荒い碁盤ごばん縞じまの服を着て、同じハンチングをつけた男の肩の恰好が、それらしくも見えます。又、赤黒い色の支那服を着て、支那の帽子をかぶり、態と長い辮べんぱつ髪を垂れた男が、どうやら井上らしくも見えます。そうかと思うと、ピッタリ身についた黒の肉にくじ

襦袢ゆばんを着て、黒絹で頭を包んだ男の歩きっぷりが、あの男らしくも思われるのです。

臃なる部屋の様子が影響したのでもありません。或は又、先にも云った通り、彼等の変装が揃そろいも揃そろって巧妙を極めていたからでもありません。が、それらの何れいずよりも、覆面というものが、人を見分け難にくくする力は恐しい程でありました。一枚の黒布、それがこの不可思議な、または無気味な光景を醸かもし出す第一の要素となったことは申すまでもないのです。

やがて、お互がお互を探り合い、疑い合つて、奇妙なだんまりを演じているその場へ、先程玄関に立っていたボーイ体の男が入つて来ました。そして、何か諳あんし誦しょうでもするような口調で、次

のような口上を述べるのでありました。

「皆様、長らくお待ち致しましたが、もはや規定の時間でもございますし、御人数もお揃いのようでございますから、これからプログラムの第一に定め^きました、ダンスを始めて頂くことに致します。ダンスのお相手を定めますために、予めお渡し申しました番号札を、私までお手渡しを願ひ、私がそれを呼び上げますから、同じ番号のお方がお一組におなり下さいますよう。それから、甚だ失礼ではございますが、中にはダンスというものを御案内のないお方様がおいでになりますので、今夜は、どなた様も、ダンスを踊るというお積^{つも}りでなく、ただ音楽に合せまして、手をとり合つて歩き廻るくらいのお考えで、御案内のないお方様も、少しも

御遠慮なく、御愉快をお尽し下さいますよう。尚^なお、組合せが極まりましたならば、お興を添えますために、その部屋の電燈をつかり消すことになっておりますから、これもお含みおきくださいますようお願い致します」

これは多分井関さんが命じたままを復唱したものに過ぎないのでしょうが、それにしても何という変てこな申渡しでありましよう。いずれは狂気めいた二十日会の催しのことですけれど、ちと薬が利^ききすぎはしないでしょうか。私は、それを聞くと、何となく身のすくむ思いがしたことであります。

さて、ボーイ体の男が番号を讀上げるに従つて、私達三十四人の男女は、丁度小学生のように、そこへ一緒に並びました。そし

て、十七対ついでの男女の組合せが出来上った訳です。男同志どうしでさえ、誰が誰だか分らないのですから、まして相手と定きまった女が何者であるか、知れよう道理はありません。夫々の男女は、朧もと氣な燈光の下に互に覆面を見交して、もじもじと相手の様子を伺うかがっています。流石さすがに奇を好む二十日会の会員達も、いささか立たちすくみの形でありました。

同じ番号の縁で私の前に立つた婦人は、黒っぽい洋装をして、昔流の濃い覆面をつけ、その上から御丁寧にマスクをかけていました。一見した所、こうした場所にはふさわしくない、しとやかな様子をしていましたけれど、さて、それが何者であるか、専門のダンサーなのか、女優なのか、或はまた堅かたぎ氣の娘さんなのか、

井関さんの先だせんつての口振りでは、まさか芸妓げいしやなどではありま
すまいが、何しろ、全く見当がつかないのです。

が、だんだん見えています内に、相手の女の身体からだつきに、何だか
見覚えのあるような気がしてきました。気の迷いかも知れませ
んけれど、その恰好は、どこやらで見たことがあるのです。私がそ
うして彼女をジロジロ眺めている間に、先方でも同じ心と見えま
して、長髪画家に変装した私の姿を熱心に検査し、思いわずらっ
ている様子でした。

あの時、蓄音器の廻転し始めるのがもう少しおそく、電燈の消
えるのがちよつとでも遅れたなら、或は私は、後に私をあのよう
に驚かせ恐れさせた所の相手を、已すでに見破っていたかも知れない

のですが、惜しいことには、もう少しという所で、一時に広間が暗黒になってしまったのです。

ハツと暗闇になったものですから、仕方なく、或はやつと勇気づいて、私は相手の女の手を取りました。相手の方でも、そのしなやかな手頸てくびを私にゆだねました。気の利いた司会者は、態とダンス物を避けて、静かな絃楽合奏のレコードをかけましたので、ダンスを知った人も、知らない人も、一様に素人しろうととして、広間の中を廻り始めました。若しそこに僅かわずの光でもあろうものなら、気がさして、迎とても踊ることはできなかったでしょうが、司会者の心遣いで、幸い暗闇になっていたものですから、男も女も、案外活潑に、おしまいには、コツコツという沢山たくさんの蹠音あしおとが、それ

から、あらい息使いが、広間の天井に響き渡る程も、勢いきおいよく踊り出したものであります。

私と相手の女も、初めの間は、遠方から手先を握り合つて、遠慮勝ちに歩いていたのが、だんだん接近して、彼女の顎あごが私の肩に、私の腕かいなが彼女の腰に、密接して、夢中になつて踊り始めたのであります。

三

私は生れてから、あのような妙な氣持あじわを味つたことがあります。それは、まっくらな部屋なのです。そこの、寄木細工なめらの滑か

な床の上を、樹の肌を叩たたいている無数の啄木鳥きつつきのように、コツコツコツコツと、不思議なリズムをなして、私達の靴音が走っています。そして、ダンス伴奏にはふさわしくない、寧ろ陰惨むしな、絃楽またはピアノのレコードが、地の底からのように響いています。目が闇になれるに従って、高い天井の広間うちの中を、暗いため一層数多く見える、沢山の人の頭が蠢うごいているのが、おぼろげに見えます。それが、広間のところどころに、巨人のように屹きつりつ立した、数本の太い円柱をめぐって、チラチラと入乱れている有様は、地獄の饗宴とでも形容したいような、世にも奇怪な感じのものでありました。

私は、この不思議な情景の中で、どこことなく見覚えのある、し

かしそれが誰であるかは、どうしても思出せない一人の婦人と、手を執^とり合つて踊っているのです。そして、それが夢でも幻でもないのです。私の心臓は、恐怖とも歓喜ともつかぬ一種異様の感じを以て烈^{はげ}しく躍^{おど}るのでありました。

私は相手の婦人に対して、どんな態度を示すべきかに迷いました。若しそれが売女のたぐいであるなれば、どのような不作法も許されるでありましょう。が、まさかそうした種類の婦人とも見えません。では、それを生^{なりわい}業^いにしている踊^{おどり}女^めのたぐいでもありましようか。いやいや、そんなものにしては、彼女はあまりにしとやかで、且^かつ舞踏の作法さえ不案内のように見えるではありませんか。それなら、彼女は堅気の娘或はどこかの細君でも

ありましようか。もしそうだとすると、井関さんの今度のやり方は、余りに御念の入った、寧ろ罪深い業わざと云わねばなりません。

私はそんなことを忙せわしく考えながら、兎も角も皆みんなと一緒に廻まわり

歩いておりました。すると、ハツと私を驚かせたことには、そうして歩いている間に、相手の婦人の一方の腕が、驚くべき大胆さを以て、スルスルと私の肩に延ばされたではありませんか。しかもそれは、決して媚こびを売る女のやり方ではなく、と云つて、若い娘が恋人に対する感じでもなく、少しのぎこちなさも見せないでさもなれなれしく、当然のことのように行われたのであります。

間近まぢかく寄った彼女の覆面からは、軽くにおやかな呼い吸きが、私の顔をかすめます。滑かな彼女の絹服が、なよなよと、不思議な感

触を以て、私の天鷲絨びろうどの服にふれ合います。このような彼女の態度は俄にわかに私を大胆にさせました。そして、私達は、まるで恋人同志のように、無言の舞踏を踊りつづけたことであります。

もう一つ私を驚かせたのは、闇をすかして外の踊手達を見ますと、彼等も亦また、私達と同じように、或は一層大胆に、決して初対面の男女とは思えないような踊り方をしていることであります。一体まあ、これは何という気違い沙汰ざたでありましょう。そうしたことに慣れぬ私は身も知らぬ相手と、暗闇の中で踊り狂っている自分が、ふと空恐しくなるのでした。

やがて、丁度皆が踊り疲れた頃に、蓄音器の奏樂がハタと止つて、先程のボーイの声が聞えました。

「皆様、次の部屋に、飲み物の用意が出来ましてございます。^{しばらく}暫くあちらで御休息くださいますようお願い致します」

声につれて境のドアが左右に開かれ、まぶしい光線がパツと私達の目をうちました。

踊手達は、司会者の万遺漏なき心くばりを感じながら、しか

し無言のまま、一対ずつ手を取り合つて、その部屋へ入るのでした。広間には比ぶべくもありませんが、でも相当広い部屋に、十七箇の小食卓が、純白のクロスに覆われて、配置よく並んでいました。ボーイの案内につれて、私と私の婦人とは、隅の方のテーブルにつきました。見ると、給仕人はなくて、^{おのおの}各々のテーブルの上に、二つのグラスと二本の洋酒の瓶が置かれてあります。

一本はボルドウの白葡萄酒^{ぶどうしゅ}、他の一本は無論男のために用意せられたものですが、三^{シャンパン}鞭酒^{びん}などではなく、何とも知れぬ不思議な味の酒でした。

やがて奇怪な酒宴が開かれました。堅く言葉を発することを禁じられた私達は、まるで啞者のように黙々として、杯^{さかずき}を満たしては飲み、満たしては飲みしました。婦人達も勇敢に葡萄酒のグラスをとるのでした。

それは可なり強烈な酒であつたと見え、間もなく私は烈しい酔を覚えました。相手の婦人に、葡萄酒をついでやる私の手が、瘡^{おこり}のように震えて、グラスの縁^{ふち}がカチカチと鳴りました。私は思わす変なことを怒鳴りそうになつては、慌^{あわ}てて口をつぐみました。

私の前の覆面の女は、口までも覆った黒布を片手で少し持上げて、つつましく杯を重ねました。そして、彼女も酔ったのでしよう。

覆面をはずれた美しい皮膚は、もう真赤になっておりました。

そうして、彼女を見ている内に、私はふと私のよく知っている、ある人を思い浮べました。彼女の頸から肩の線が、見れば見る程、その人に似ているのです。しかし、その私の知っている人が、まさかこんな場所へ来る筈はありません。最初から、何となく見たようなと感じたのは、恐らく私の気の迷いに過ぎなかつたのでしよう。世の中には、顔でさえも瓜^{うり}二つの人があるくらいです。姿勢が似ていたからとて、迂濶^{うかつ}に判断を下すことはできません。

それは兎も角、無言の酒宴は、今や酣^{たけなわ}と見えしました。言葉を発

するものこそありませんけれど、室内はガラスの触れ合う響、衣ひびききぬずれの音、言葉なを為さぬ人声などで、異様にどよめいて来ました。誰も彼も、非常に酔っているように見えました。若しあの時、ボーイの口上が少しでもおくれたなら、誰かが叫び出したかも知れません。或は誰かが立上って踊り出したかも知れません。が、流石は井関さんの指図です。最も適当な時機にボーイが現れました。「皆様、お酒が済みましたら、どうか踊り場の方へお引上げを願います。あちらではもう、音楽が始っております」

耳をすますと、隣の玄関からは、酔客達の心をそそるように、前とはガラリと変った快活な、寧ろ騒々しい管絃樂が響いて来ました。人々は、その音楽に誘われるようにゾロゾロと広間に帰り

ました。そして、以前に数倍した物狂わしき舞踏が始まるのでした。

あの夜の光景を、何と形容したらいいでしょう。耳も聾ろうせんばかりの騒音、闇の中に火花が散るか見える無数の乱舞、そして意味のない怒号、私の筆では到底、ここにその光景を描き出すことはできません。のみならず、私自身も、四肢の運動につれて発した、極度の酔に正気を失って、人々が、また私自身が、どのような狂態を演じたかを、殆ど記憶しないのであります。

四

焼けるような喉の乾きを覚えて、ふと目を覚すと、私は、私の寝ていた部屋が、いつもの自分の寝室でないことに気づきました。さては、昨夜^{ゆうべ}踊り倒れて、こんな家^{うち}へ担ぎ込まれたのかな。それにしても、この家は一体全体どこだろう。見ると、枕^{まくら}許^{もと}の手の届く所へ、呼鈴^{ベル}の紐が延びています。私は兎も角、人を呼んで聞いて見ようと思い、その方へ手を伸しかけて、ふと気がつくと、その煙草^{たばこ}盆^{ぼん}の側^{わき}に、一束の半紙が置かれ、その一番上の紙に何か鉛筆の走り書きがしてあるのです。好奇心のまま読みにくい^{かな}仮名文字を、何気なく拾って見ますと、それは次のように認^{した}めてありました。

「あなたは随^{ずい}分^{ぶん}ひどい方です。お酒の上とは云えあんな乱暴な

人とは知りませんでした。しかし今更いまさら云つても仕様しようがありません。私はあれは夢であつたと思つて忘れます。あなたも忘れて下さい。そして、このことは井上には絶対に秘密を守つて下さい。お互のためです。私はもう帰ります。春子はるこ」

それを読んで行くうちに、寐ねぼけていた頭が、一度にハッキリして、私は何もかも悟ることができました。「あれは、私の相手を勤めた婦人は、井上次郎の細君だったのか」そして、云い難き悔かい恨こんの情が、私の心臓をうつろにするかと怪あやしまりました。

泥酔していたとはいえ、夢のように覚えています。昨夜、闇の乱舞が絶頂に達した頃、例のボーイが、そつと私達の側へ来て囁ささやきました。

「お車の用意が出来ましてございます。御案内致しましょう」

私は婦人の手を携えて、ボーイのあとにつづきました。（どう

して、あの時、彼女はあんなに従順に、私に手を引かれていたの
でしょう。彼女もまた酔っていたのでしょうか）玄関には一台の
自動車が横づけになっていました。私達がそれに乗ってしまうと、
ボーイは運転手の耳に口をつけて、「十一号だよ」と囁きました。
それが私達の組合せの番号だったのです。

そして、多分この家へ運ばれたのです。その後のことは一層
ぼんやりして、よくは分りませんけれど、部屋へ入るなり、私は
自分の覆面をとったようです。すると、相手の婦人は「アツ」と
叫んで、いきなり逃げ出そうとしました。それを夢のように思出

することができません。でもまだ、酔いしれた私は、相手が何者であるかを推察することができなかったのです。凡て泥酔のさせた業です。そして、今この置手紙を見るまで、私は彼女が友人の細君であつたことさえ知らなかったのです。私は何という馬鹿者でありましょう。

私は夜の明けるのを恐れました。もはや世間に顔の出せない気がします。私はこの次、どういう態度で井上次郎に逢えばいいのでしょうか。また当の春子さんに逢えばいいのでしょうか。私は青くなつてとつおいつ、返らぬ悔恨に耽ふけりました。そういえば、私は最初から相手の婦人にある疑いを持つていたのです。覆面と変装とに被おおわれていたとはいえ、あの姿形すがたは、どうしても春子さんに

相違なかつたのです。私はなぜもつと疑つて見なかつたのでしよう。相手の顔を見分けられぬ程も泥酔する前に、なぜ彼女の正体を悟り得なかつたのでしよう。

それにしても、井関さんの今度のいたずらは、彼が井上と私との親密な関係を、よく知らなかつたとはいへ、殆ど常軌じょうぎを逸いつしていると云わねばなりません。たとい私の相手が他の婦人であつたにしても、許すべからざる計画です。彼はまあ、どういう気で、こんなひどい悪わる企たくみを目論もくろんだのでありましよう。それにまた、春子さんも春子さんです。井上という夫のある身が、知らぬ男と暗闇で踊るさへあるに、このような場所へ運ばれるまで黙つているとは、私は彼女がそれほど不倫な女だとは、今の今まで知りま

せんでした。だが、それは皆私の得手勝手^{えてかって}というものでしょう。私さえあのように泥酔しなかつたら、こんな、世間に顔向けもできないような、不愉快な結果を招かずとも済んだのですから。

その時の、なんとも云えぬ不愉快な感じは、いくら書いても足りません。兎も角、私は夜の明けるのを待ち兼ねて、その家を出ました。そして、まるで罪人でもあるように、白粉こそ落しましたけれど、殆ど昨夜のままの姿を車の幌に深く隠して家路についたことであります。

五

家^{うち}に帰っても、私の悔恨は、深まりこそすれ、決して薄らぐ筈はありません。そこへ持つてきて、私の女房は、彼女にして見れば無理もないことでしょうが、病氣と称して一間にとじ籠^{こも}ったきり、顔も見せないのです。私は女中の給仕でまずい食事をしながら、悔恨の情を更に倍加したことであります。

私は、会社へは電話で断つておいて、机の前に坐ったまま、長い間ぼんやりしていました。眠くはあるのですが、とても寐る気にはなれません。そうかといって、本を読むことも、その外^{ほか}の仕事をすることも、無論駄^だ目です。ただぼんやりと、取返しのつかぬ失策を、思いわずらっているのです。

そうして、思いに耽^たっている内に、私の頭にふと一つの懸念が

浮んで来ました。

「だが待てよ」私は考えるのでした。「一体全体こんな馬鹿馬鹿しいことがあり得るものだろうか。あの井関さんが昨夜のような不倫な計画を立てるというのも変だし、それにいくら泥酔していたとはいえ、朝になるまで相手の婦人を知らないでいるなんて、少しおかしくはないか。そこには、私をして強^しいてそう信じさせるような、技巧が弄^{ろう}せられてはいなかったか。第一、井上の春子さんが、あのおとなしい細君が、舞踏会に出席するということのも信じ難^{がた}いことだ。ああそうだ。問題はあの婦人の姿なんだ。殊に頸から肩にかけての線なんだ。あれが井関さんの巧妙なトリックではなかったのか、遊里^{ゆうり}の巷^{ちまた}から、覆面をさせれば春子さんと見擬^{みなが}

うような女を、探し出すのは、さほど困難ではないだろう。俺はそうした影武者のために、まんまと一杯食わされたのではないか。そして、この手にかかったのは、俺だけではないかも知れない。人の悪い井関さんは、意味ありげな暗闇の舞踏会で、会員の一人一人を俺と同じような目に会せ^{あわ}、あとで大笑いをする積りだったのではないか。そうだ、もうそれに極った」

考えれば考える程、凡ての事情が私の推察を裏書きしていました。私はもうくよくよすることを止め、先程とは打って変って、ニヤニヤと気味の悪い独り^{ひと}笑いを、洩^{もら}しさえるのでした。

私はもう一度外出の支度^{したく}をととのえました。井関さんの所へ押しかけようというのです。私は彼に、私がどんなに平気でいるか

ということを見せつけて、ゆうべ 昨夕の仕返しをしなればなりません。

「オイ、タクシイを呼ぶんだ」

私は大声に、女中に命じました。

私の家から井関さんの住居までは、すまい さして遠い道の前ではありません、やがて車は彼の玄関に着きました。ひよつと店の方へ出ていはしなかと案じましたが、幸い在宅だということで、私はすぐさま彼の客間に通されました。見ると、これはどうしたというのでしょうか。そこには、井関さんの外に二十日会の会員が、三人も顔を揃えて談笑していたではありませんか。では、もう種明しが済んだのかしら、それとも、この連中だけは、私のような目にも会わなかったのかしら。私は不審に思いながら、しかしさも愉

快そうな表情を忘れないで、設けられた席につきました。

「ヤア、昨夜は^{ゆうべ}お^{たの}しみ」

会員の一人が、からかうように声をかけました。

「ナア二、僕なんざ駄目ですよ。君こそお楽しみでしたらう」

私は、顎を撫^なでながら、さも平然と答えました。「どうだ驚い

たか」という腹です。ところが、それには一向^{いつこう}反響がなくて、

相手から返って来た言葉は、実に奇妙なものでありました。

「だって、君の所のは、我々の内で一番新しいんじやありませんか。お楽しみでない筈はないや。ねえ、井関さん」

すると、井関さんは、それに答える代りに、アハアハと笑っているのです。どうも様子が変わなのです。しかし、私は、ここで弱

味を見せてはならぬと、さらに一層平気な表情を作るのに骨折りました。が、彼等は私の表情などには、一向お構いなく、ガヤガヤと話を続けるのです。

「だが、昨夜の趣向は確に秀逸たしかだったね。まさか、あの覆面の女が、てんでんの女房たあ気がつかないやね」

「あけてくやしき玉手箱か」

そして、彼等は声を揃えて笑うのです。

「無論、最初札を渡す時に夫妻同一番号にして置いたんだろうが、それにしても、あれだけの人数がよく間違わなかったね」

「間違ったら大変ですよ。だから、その点は十分気をつけてやりました」井関さんが答えるのです。

「井関さんから予め旨^{むね}を含めてあつたとはいえ、女房連^{れん}、よくやつて来たね。あれが自分の亭主だからいいようなものの、味を占めて外^{ほか}の男にあの調子でやられちゃ、たまらないね」

「危険を感じます、かね」

そして、またもや笑^{しょうせい}声^{こゑ}が起りました。

それらの会話を聞く内に、私は最早^{もは}やじつと坐っているに耐えなくなりました。多分私の顔はまっ青^{さお}であつたことでしょう。これですっかり事情が分りました。井関さんは、あんなに自信のあるようなことを云っていますが、どうかした都合で、私だけ相手が間違つたのです。自分の女房の代りに春子さんと組合つたのです。私は運悪くも、偶然、恐しい間違いに陥^{おと}されてしまったので

す。

「だが」私はふと、もう一つの恐しい事実気づきました。冷いものが、私の脇の下をタラタラと流れました。「それでは、井上次郎は一体誰と組んだのであろう？」

云うまでもないことです。私が彼の妻と踊ったように、彼は私の妻と踊ったのです。オオ、私の女房が、あの井上次郎と？ 私には眩暈めまいのために倒れそうになるのをやつとこらえました。

それにしても、それはまた、何という恐しい錯誤でありましょう。挨拶あいさつもそこそこに、井関さんの家を逃れ出した私は、車の中で、ガンガンいう耳を押えながら、どこかにまだ、一縷いちるの望みがあるような気がして、いろいろと考え廻すのでありました。

そして、車が家へつく頃、やっと気がついたのは、例の番号札のことでした。私は車を降りると家の中へ駈け込み、書斎にあった、変装用の服のポケットから、その番号札を探し出しました。見ると、そこには横文字で、十七と記しるされています。ところで、昨夜の私達の番号は、私ははつきり覚えていました。それは十一なのです。分りました。それは井関さんの罪でも、誰の罪でもないのです。私自身の取返しのかぬ失策なのです。私は井関さんから前以てその札を渡された時、間違わぬようにと、くれぐれも注意があつたにも拘らず、よくも見て置かないで、あの会場の激情的な空気の中で、そぞろ心に見たのです。そして1と7とを間違えて、十一番と呼ばれた時に返事をしたのです。でも、ただ番

号の間違いくらいから、こんな大事を惹起ひきおこそうとは、誰が想像しましょう。私は、二十日会などという気まぐれなクラブに加入したことを、今更ら後悔しないではいられませんでした。

それにしても、井上までがその番号を間違えたというのは、どこまでいたずらな運命でしょう。恐らく彼は、私が十一番の時に答えたため、自分の札を十七番と誤信してしまったのでしょう。それに井関さんの数字は、7を1と間違い易いような書体だったのです。

井上次郎と私の妻とのことは、私自身の場合に引比べて、推察に難くかたありません。私の変装については、妻は少しも知らないのですし、彼等も亦、私同様、狂者のように酔っぱらっていたので

すから。そして、何よりの証拠は、一間にとじ籠って、私に顔を見せようともせぬ、妻のそぶりです。もう疑う所はありません。

私はじつと書齋に立ちつくしていました。私には最早ものを考える力ありませんでした。ただ、焼きつくように私の頭を襲うものは、恐らく一生涯消え去る時のない、私の妻に対する、井上次郎に対する、その妻、春子に対する、唾^{だき}棄すべき感情のみでありました。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第3巻 陰獣」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年11月20日初版1刷発行

底本の親本：「創作探偵小説集第四巻」春陽堂

1926（大正15）年9月26日発行

初出：「婦人の国」新潮社

1926（大正15）年1～2月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※底本巻末の平山雄一氏による註釈は省略しました。

入力：金城学院大学 電子書籍制作

校正：まつもこ

2018年7月27日作成

2018年9月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

覆面の舞踏者

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>